

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集

館林市内遺跡発掘調査報告書  
TATEBAYASHI-SHINAI

1987

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集

館林市内遺跡発掘調査報告書  
TATEBAYASHI—SHINAI

1987

館林市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、館林市内に所在する遺跡の発掘調査についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、市内に所在する遺跡における緊急発掘調査である。
3. 調査は、館林市教育委員会が主体となり実施したものでありその組織は次の通りである。

教 育 長	堀 越 亘
教 育 次 長	伊 藤 敏 夫
担 当 主 管	館林市教育委員会 文化振興課 文化財係
文化振興課長	坂 本 充 弘
文化財係長	三 田 正 信
主 事 補	黒 沢 文 隆 (担当)
嘱 託	藤 坂 和 延

4. 調査の期間は、昭和62年4月～昭和63年3月である。
5. 調査に伴う諸経費は、国庫補助・県費補助を得て館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレース・写真撮影・編集は、黒沢・藤坂が行った。
7. 本報告書は、青柳城跡・水溜第一地点遺跡・北近藤第一地点遺跡の発掘調査をまとめたものである。
8. 調査から、報告書刊行にあたり、諸氏・諸機関にご指導・ご教示・ご協力いただいた。感謝いたします。

### (地権者)

田崎修治、島田時男、島田繁男、松平正敏

### (発掘参加者)

新井清松、飯島富子、石井ソノ、石川栄吉、石橋矢三、内山加代子、太田鉄雄、小曾根靖子、川島 清、北上晋子、越谷長男、小林江里、小須賀清、近藤久美子、坂田彦次、坂村 ヨツ、鹿野実吉、菅沼一男、菅沼徳次、杉山信作、須永よし、高際陽子、滝澤一美、津田照子、寺内義正、中里昇、新田由美子、根岸良子、原 しげ、林 正行 早野 茂、町井美知子、八木嘉市、深瀬高蔵、山田竹雄、葭葉タカ、葭葉嘉亮、若度秀子、渡辺喜一、寺内景子

## 本文目次

例	言	1
本文目次		II
図版目次		II
写真目次		III
第I章	館林市の環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第II章	調査の内容	4
第1節	青柳城遺跡	4
第2節	水溜第一地点遺跡	6
第3節	北近藤第一地点遺跡	11

## 図版目次

第1図	館林の地勢と遺跡分布図	3
第2図	水溜第一地点遺跡現況図	8
第3図	水溜第一地点遺跡調査区全体図	9
第4図	北近藤第一地点遺跡現況図	13
第5図	北近藤第一地点遺跡調査区全体図	14

## 写 真 目 次

写真 1	青柳城跡遠景 .....	5
写真 2	調 査 風 景 .....	5
写真 3	水溜第一地点遺跡遠景 .....	6
写真 4	調 査 風 景 .....	8
写真 5	水溜第一地点遺跡出土遺物 .....	10
写真 6	北近藤第一地点遺跡遠景 .....	11
写真 7	調 査 風 景 .....	13
写真 8	第 2 号住居址 .....	15
写真 9	第 3 号住居址 .....	16
写真 10	第 4 号住居址 .....	16
写真 11	第 2 号住居址出土遺物 .....	17
写真 12	第 3 号住居址出土遺物 .....	18
写真 13	第 4 号住居址出土遺物 .....	18

## 第1章 館林市の環境

### 第1節 地理的環境

館林市は、関東地方のはば中央部に位置する。群馬県内にあっては、東毛地区の中核都市として位置づけられている。

北は渡良瀬川を隔てて栃木県、東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊泳地で茨城県、南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県とそれぞれ接している。

首都東京からの距離は65km、急行電車で約一時間を要する。県都前橋へは約50kmの距離にあるものの直結する交通機関に恵まれていない。

次に本市の地形を概観してみると、「邑楽・館林台地」と呼ばれる低台地（洪積台地）と、利根川・渡瀬川の両大河によって形成された低地（洪積台地）に大別される。

「邑楽・館林台地」は、太田市高林から、大泉町・邑楽町・館林市・板倉町へと連なる洪積台地である。台地を構成するのは、河川堆積物とされる礫・砂・シルトの互層と、その上部を被る中部・上部ローム層である。台地の形成時期については、下末吉海進時に遡るとされる。

台地西端に沿って、やはり下末吉海進時に形成されたとされる内陸古砂丘が連なる。本市の最高点はこの砂丘上にあり、標高は高根で33mを示す。

台地の周辺には洪積台地が広がる。標高は14～16mを示す。

低地中には、大小の旧河道が確認され、これに沿うように自然堤防が連なる。

台地と低地の境には、開折谷による寝食が著しく、谷頭には、城沼・近藤沼・茂林寺沼等の池沼や谷地を形成している。

なお、関東造盆地運動の中心が本市の東南方面に当るため、本地域の地形は、西北から東南にかけて緩やかに傾斜している。

また、昭和58年度から5ヶ年に亘り実施された市内遺跡詳細分布調査（以後分布調査と略す。）における地形確認では、近代における土地改良等により古地形復元が困難な地域も幾つか見られる。

### 第2節 歴史的環境

『群馬県遺跡台帳』（昭和46年）には、市内所在の遺跡として46遺跡が記載されている。

分布調査の結果によると、遺物の散布する地域は、台帳掲載の範囲を大きく上回る。本年度は分布調査の最終年度に当り、遺跡の名称の点で旧台帳と混乱をきたす恐れがあるため、本節

では便宜上、台帳登載の遺跡の状況を中心に述べ、分布調査の結果は補足としたい。

旧石器時代の遺跡は、多々良沼南岸の内陸古砂丘上の水溜第一地点・同第二地点・山神脇・高根の4遺跡と、近藤沼北岸の北近藤第二地点・伝右エ門の2遺跡が台帳に見える。分布調査では、土地改変の著しい水溜の2遺跡を除き、濃淡はあるものの遺物が再確認されている。その他大袋Ⅰ遺跡の発掘調査では、遺物集中箇所が6箇所確認されている。

縄文時代の遺跡は、城沼・旧矢場川（台地北辺に沿うように蛇行する旧河道や、これに伴う自然堤防によりかつての存在が推定される流路）・茂林寺沼・蛇沼等の周辺で確認される。地域別に示すと、城沼周辺……下志柄・花山東・大袋Ⅰ・大袋Ⅱ・三軒屋・屋敷浜・善長寺付近、旧矢場川周辺……加法師・外加法師・岡・岡野・朝日町・大街道、茂林寺沼・蛇沼周辺……腰巻・笹原・下堀工道満・大原道東・間堀、というような状況である。これまでの発掘調査では、大袋Ⅱ遺跡で早期の炉穴・前～中期の住居址、間堀遺跡で前～中期の住居址、といった遺構が検出されている。その他、昭和59年の蛇沼川改修計画に伴い調査が実施された上の前遺跡（台帳未登載）では、中～晩期の遺物が確認されている。分布調査の結果も、概ね台帳登載の遺跡は再確認され、その他幾つかの散布地が広がる。

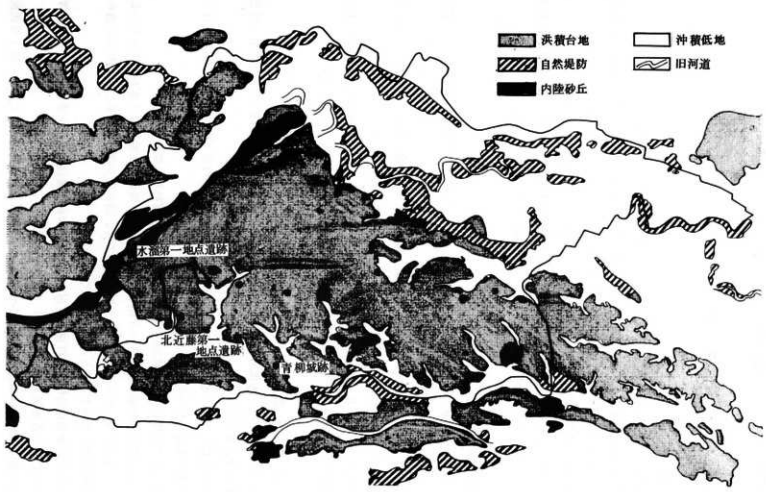
弥生時代の遺跡は、台帳に道満遺跡（昭和45年東北縦貫自動車道館林インターチェンジ建設に伴い調査）が見られるのみである。分布調査で遺物散布が確認されたものも僅かであり、遺物の摩耗も著しい。

古墳時代の遺跡は市内全域に広がる。発掘調査によって住居址が確認できたものに、八方遺跡・北近藤第一地点遺跡・伝右エ門遺跡・尾曳町遺跡（台帳未登載）等がある。その他、この時代の遺跡として特筆するものに、昭和61年渡良瀬川河床において発見された大島下悪途遺跡がある。市内低地帯において実施されたボーリング調査（試錐調査）からも、古墳時代以前において、洪積台地と沖積低地の比高差が大きいことを窺わせる結果を示しており、沖積低地下に埋没している遺跡の存在を予想させる。

古墳は、町谷・富士山・山王山・富士嶽神社の5基が台帳に見える。昭和10年の群馬県下の古墳の状況をまとめた『上毛古墳総覧』には、市内に67基の古墳が存在したことが記されているが、分布調査によって確認されたものは少ない。（17基）

奈良・平安時代の遺跡としては、台帳に道満遺跡が見られるのみである。しかし分布調査の結果では、この時代の遺物散布状況は台地上の各地に広がり、自然堤防上においても確認できる。まとめて散布する箇所だけでも台帳登載の遺跡数を大きく上回っている。

中世の遺跡は、青柳城跡・大袋城跡・白旗城跡・北大島館跡というようにいずれも城館址である。その他、文献・古記録等により、中世城館の伝承地は十数箇所が増えるが、分布調査によって館址的な遺構が再確認できたものは少ない。



第1図 館林の地勢と遺跡分布図



## 第Ⅱ章 各遺跡の内容

### 第1節 青柳城跡

#### 立地と環境

青柳城跡は、館林市の南部、国道122号線西側に所在する中世城館跡である。

地形的には、西を近藤沼・谷田川に連なる低地帯、東を茂林寺沼・旧東沼に連なる低地帯に挟まれた比高およそ2mの台地上に立地している。

現在は、青柳字堀ノ内に当り、青柳地区の中心地として宅地化されている。

遺跡地の南には、館址の堀に比定されている青柳幹線排水路が東流し、宮田川を経て谷田川に至っている。また、排水路の南側には、土塁と思われる土盛が一部残存している。

#### 館林市の中世城館

館林市内の中世城館としては、当遺跡の他に、北大島館跡・大袋城跡・白旗城跡が『群馬県遺跡台帳』（昭和46年刊）に記載されている。

その他の文献・古記録等によると、待辺城・磯ヶ原城・高根城・木戸城の存在が言われているが、史実と照らし合わせてのその性格については不明である。

昭和58年より、市教育委員会の分布調査の結果によると、これらの城館址は、現況ではほとんど遺構の形態を留めておらず、時代設定のできる遺物等の確認もされていない。

#### 調査の概要

青柳城跡の調査は、地権者田崎修治氏の館林市大字青柳字堀ノ内1948-3における個人開発に伴う事前確認調査である。

市教育委員会では、地権者より申し出があった時点で遺跡の取り扱いについて協議を行うとともに現地確認を行った。

現地における遺跡の保存状態は極めて悪く、瓦等の遺物も採取できない。

南には、青柳城の堀の跡とされる排水路が東流するが既に三面側溝の工事が施されている。

また、当地に残っていたとされる土塁についても、聞き取り調査では第二次大戦中に造られた防空壕の排土であると言う。

以上のことを基に地権者と再協議を図った結果、事前に確認調査を実施し、建築遺構等が確認された場合再協議するものとして了解を得た。

調査は開発区域内に南北の試掘溝（巾1.5m）を掘り、土塁と言われた土盛の地下の状況を

確認するとともに、その他の遺構の検出を図った。

この結果、土盛については基礎工事を伴うものでないことが判明した。

また、試堀溝の土層状況から、調査地南面の排水路の旧地形が確認された。排水路を挟んだ南には、土盛と思われる土盛があり、当調査地は郭の外側にあたることが予想される。

その他、青柳城と結びつく建築遺構は無く、遺物も特筆するものは検出されなかった。



写真 写真1 青柳城跡遠景



写真 写真2 調査風景

## 第2節 水溜第一地点遺跡

### 周辺の遺跡

水溜第一地点遺跡は、国道345号線南側に所在する。

遺跡は、千代田町古海から本市高根に至る本州最大の内陸古砂丘上に立地している。

この内陸古砂丘上には、旧石器時代に比定できる遺物を採取できる遺跡が多い。本市では、本遺跡をはじめ、水溜第二地点遺跡・高根遺跡・山神脇遺跡の4遺跡が、『群馬県遺跡台帳』に記載されている。

本遺跡の西方約200mの水溜第二地点遺跡では、剥片・ナイフ形石器・搔器・尖頭器等の石器が確認されている。（『館林双書第一巻』）昭和57年度同遺跡地内において実施された個人開発に伴う事前確認調査では、遺構・遺物とも確認されていない。

本遺跡を含む市内北西部では、昭和60年度に市教育委員会により分布調査が実施されている。これによると、水溜周辺では、採土・掘削による土地改変が著しく、高台として残っている部分は少ない。このため、遺物等の散布はほとんど見られない。



写真3 水溜第一地点遺跡遠景

## 調査に至る経過

水溜第一地点遺跡の発掘調査は、地権者島田時男氏の館林市大字成島字水溜1254-42・43における個人開発に伴う事前確認調査である。

市教育委員会では、同氏より開発協議書が、代理人を通じて市建築課へ提出された時点で、協議を開始するとともに、現地の確認を行った。

同地の現状は土地改変が著しく、多くの部分が採土・掘削されているものの、1254-42・43については高台として残っている。

開発計画書を検討したところ、建築物の工事は1254-43の区域内にかかるものであり、事前に確認調査を実施し、遺物等が検出とれた場合、地権者と再協議するものとした。

この結果、ハードルームに達する攪乱中より、チャートの尖頭器が検出され、周辺部における遺構の存在が予想された。

このようなことから、再度地権者と協議を行い、隣接地1254-42においても、事前確認調査を実施するものとした。

## 調査の内容

調査は、地権者側との協議により、建築物の工事にかかる水溜1254-43地内の事前確認調査を実施した。

調査地は、前述のように採土・掘削による土地改変が著しく、表土は内陸古砂丘を構成する砂層が一部露呈していた。また周辺との比高差も大きく（約5m）、土木重機による表土除去を実施し、旧地形の把握を努めた。

調査は、区域内に3m×3mのグリッドを、南北にA～C、東西に1～14の計42箇設置し、遺物確認を試みた。この結果、礫片・黒曜石片の確認された6G以北を対象に精査し、A-7G・8Gに亘る攪乱中より、チャードの尖頭器を検出した。

この攪乱は、ハードロール層に達するものであり、表土下100cmを測る。こうしたことにより、本調査区域内または周辺地に、旧石器時代の遺構が存在することが予想された。この後、本調査区内に、明確な遺物・遺構は確認されず、地権者と再協議の結果、遺構の存在が予想される隣接地1254-42においても事前確認調査を実施することとして了解を得た。

調査は、東西・南北に任意のトレンチを掘り、土層状況を確認し、文化層の存在する可能性のある上部ローム層を対象に精査を行った。また、暗色土層の見られる区域南部についても遺物の検出を試みた。

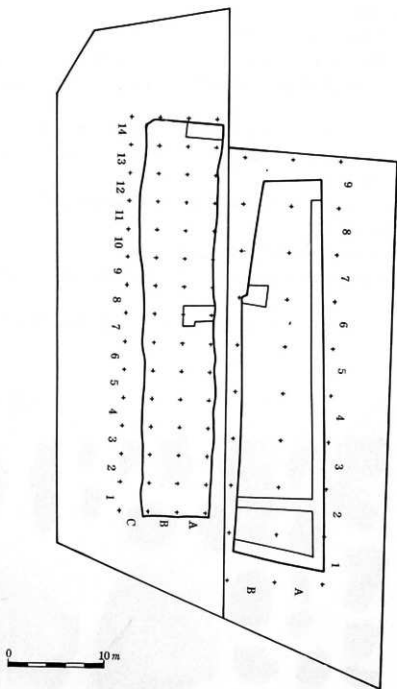
この結果、ソフトローム層から上部ローム層上部にかけて、黒曜石の円形搔器の他、多くの黒曜石片・礫片が出土した。暗色土層中については可能な限り精査したものの遺物は検出しなかった。



第2図 水溜第一地点遺跡現況図



写真4 調査風景



第3圖 水溜第一地点遺跡調査区全体圖

## 出土遺跡

本遺跡で出土した遺物について、そのあらましを述べておきたい。

前述のように、調査区内において、遺物の確認されたのは、区域北部である。この部分は、ローム層が厚く、土層状況確認の結果、砂層の上におよそ2mのロームが覆っていることが判明した。

出土層位については、ソフトローム下位～中部ロームにかけて集中する傾向がみられた。

石器の材質は、チャート・黒曜石が主なものであり、ほとんどが二次調整のみられないチップ・フリイク類である。

特筆する遺物としては、チャートの尖頭器・黒曜石の円形搔器を挙げておきたい。これらについては二次調整が見られた。

その他、表土中からは、砂岩系の標塊石器も確認されている。

また表土中からは縄文土器片も数点出土している。いずれも摩耗が著しく、明確な時代設定は困難である。

まとめて出土した黒曜石片については、現在整理中のため、接合関係を見るまで至っていない。

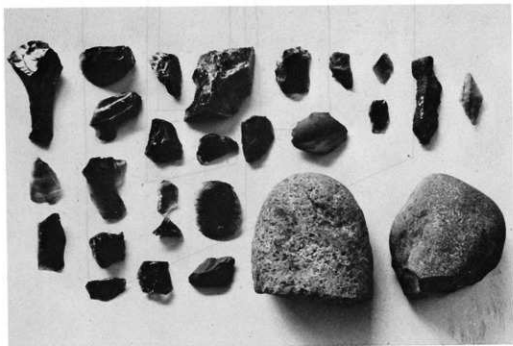


写真5 水溜第一地点遺跡出土遺物

### 第3節 北近藤第一地点遺跡

#### 周辺の遺跡

北近藤第一地点遺跡は、東武鉄道小泉線成島駅の南方約2kmに所在する。

遺跡は、近藤沼とこれに連なる低地帯の北岸の台地上に立地している。

昭和58年度より実施された分布調査では、『群馬県遺跡台帳』登載の所在地地籍の周辺地においても、古墳時代から奈良・平安時代に亘る遺物の散布が見られる。

周辺の遺跡としては、本遺跡と谷を挟んだ東側の台地に苗木遺跡がある。また、分布調査では、苗木西において、奈良・平安時代の遺物の散布が見られる。

本遺跡の西方約500mには、北近藤第二地点遺跡が所在する。その南方の南近藤においても分布調査では奈良・平安時代の遺物が見られる。

近藤沼から北へ延びる開折谷の最深部周辺では、北小袋遺跡・伝右エ門遺跡が所在する。近藤障子遺跡は、工場団地建設のため破壊され、現状の遺物散布は見られない。

本調査区である北近藤第一地点遺跡では、昭和56年度に北近藤2516-9において個人専用住宅建設のための事前確認調査が行われており、古墳時代鬼高期の住居跡が一軒確認されている。



写真6 北近藤第一地点遠景



## 調査に至る経過

北近藤第一地点遺跡の発掘調査は、地権者松平正敏氏による館林市大字青柳2680-4における個人開発に伴う緊急発掘調査である。

同地は、『群馬県遺跡台帳』№1112に記載されている所在地籍に含まれていないが、昭和58年実施の分布調査により古墳時代から奈良・平安時代に亘る遺物が確認されている。このため開発行為には注意を払ってきた地点である。

こうした中、昭和63年1月、同地点における樹木の伐採・抜根により、遺物が出土している状況が確認され、市教育委員会では地権者松平氏と協議を開始した。

現状はローム土壌が一部露呈しており、また同地点の道路を隔てた館林市大字青柳字北近藤2516-9では、昭和59年度の発掘調査において、古墳時代鬼高期の住居址が確認されている。

このようなことから、市教育委員会では、埋蔵文化財の取り扱い上、事前に確認調査を行うことが望ましいと判断した。

協議の結果、樹木の伐採を中断し、確認調査を行い、記録保存を図ることで了解を得るに至り、2月より調査を開始した。

なお、当調査地点を便宜上、北近藤第一地点遺跡B地点と呼ぶこととした。

## 調査の内容

調査地は、前述のように南を近藤沼に連なる低地帯（現在は水田）にのぞむ高台上に立地しており、南方に向けて、緩やかな傾斜をみせている。

調査地の表土は薄く、区域内南部は、ローム粒子の土壌が多量に露出している。

調査は、こうした状況を考慮し、南北のトレンチによって旧地形の確認を行い、比較的表土の厚い（約40cm）北部区域を中心に実施した。

調査方法は、区域内に任意のトレンチを掘り下げ、遺構と思われる部分を拡張し精査を行った。

この結果、重複のみられない住居址3軒が確認された。

北近藤第一地点遺跡では、これまで昭和56年の発掘調査で住居址が一軒確認されていることから、それを1号住居とし、本調査区域の3軒の住居址を、2号住居址・3号住居址・4号住居址とすることとした。

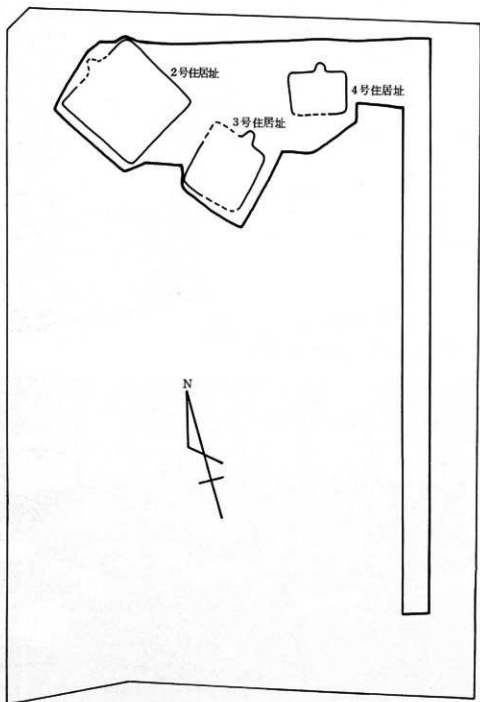
また、トレンチの拡張に伴い、多くの円石がみられたが、精査の結果、円石を含む掘り込みの中より、ビニール等が確認されており、近・現代の攪乱であることが判明した。



第4図 北近藤第一地点遺跡現況図



写真7 調査風景



第5图 北近藤第一地点遺跡調査区全体图

0 10m

## 2号住居址

調査区の北西で確認され、平面形は、650cm四方のほぼ正方形を呈する。壁は、北側で50cmを測り、やや外傾して立ち上がる。また壁面に添っての溝も確認された。柱穴は、4本確認され、半は35cm・深さは60cm前後を測る。かまどは西側で確認されたものの、大きな攪乱が入っており、袖の一部が確認できるのみであった。かまどの付近では貯蔵穴が検出され、把手付の瓶が一括で出土した。その他の遺物は、床直から古墳時代鬼高期の土師器・須恵器の出土が見られる。

## 3号住居址

調査区北部のほぼ中央で確認され、巾250cmほどの大きな攪乱が縦貫し、その全容を把握することは困難であったが、残存部から5m前後の方形を示すと思われる。壁は、40cmを測り、やや外傾して立ち上がる。壁溝は、東西に一部確認された。柱穴は、2本確認され、径は20cm・深さは40cmを測る。かまどは北側に位置し、袖は粘土で構築されていた。遺物はかまど付近を中心に多くの土師器片が出土した。

## 4号住居址

調査区北部東寄で確認された。南西部に大きな攪乱が入るものの、ほぼ全容を捉えることができた。平面形は、長軸420cm、短軸360cmを測る。壁は、北側で35cmを測る。壁溝は確認することはできたものの、柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。かまどは北側に位置し、袖は粘土で構築されていた。遺物は、古墳時代の鬼高期の土師器のその他石炭等が出土している。



写真8 2号住居址



写真9 3号住居址



写真10 4号住居址

## 出土遺物

当調査地における出土遺物については、調査終了後、現在整理中であるため、ここでは各遺構における主だった遺物について報告しておきたい。

2号住居址は、保存状況が良好であり、貯蔵穴付近から完形で出土した土師器の壺（口径cm、器高17cm）をはじめ、まとまって出土したものが幾つか在る。貯蔵穴内からは把手付の坏（器高約30cm）が出土し、その他、鬼高期の土師器の長胴の甕（器高約30cm）、同時代の土師器坏が数点出土している。

3号住居址は、カマド付近に土器片が多数出土したが、まとまったものは少なかった。特筆するものに、四分期の土師器の坏がある。口径13cm、底径6cm、器高3.15cmを測る。体部に墨書が施されるものの素読はできない。その他、鉄製の鎌もみられた。長さは約20cmを測り、基部に木片が付着している。時代設定は不明であるが、出土層位は床面であった。

4号住居址からは、遺物の出土は少なかった。特筆するものとして、鬼高期の土師器の坏（口径12cm、器高4cm）が出土した他、凹基無茎の石甕が出土している。



写真11 2号住居址出土遺物

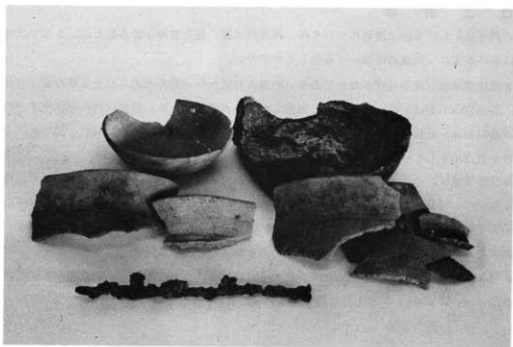


写真12 3号住居址出土遺物

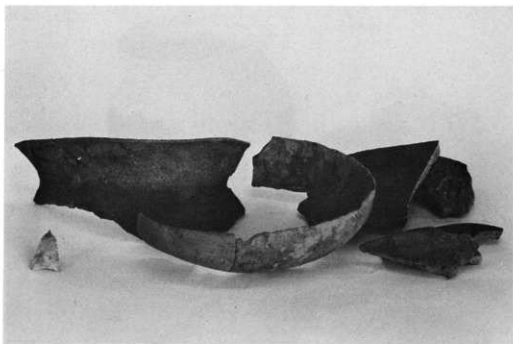


写真13 4号住居址出土遺物

---

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発行 館林市教育委員会  
印刷所 才一印刷所  
発行年月日 昭和63年3月31日

---





文化財愛護シンボルマーク  
絵巻の文化と歴史をみかへそう

